

吉永進一編『近代日本における知識人宗教運動の言説空間——「新仏教」の思想史・文化史的研究』平成二〇—二三年度科学研究費補助金・基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号：二〇三二〇〇一六）、二〇二一年

大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編
近代仏教スタディーズ

——仏教からみたもうひとつの近代

武井謙悟

一 はじめに

本書は近年研究分野で高まりをみせていく「近代仏教」という学問領域を研究界のみならず、一般にも広く周知させるという目的のため編集された入門書である。編者の一人である大谷栄一氏のあとがきによれば、近代仏教に関する二つの共同研究「近代日本における知識人運動の言説空間——「新仏教」の思想史・文化史的研究⁽¹⁾」「近代宗教のアーカイブ構築のための基礎研究⁽²⁾」のメンバーを中心に二〇一〇年九月の企画立案から刊行に至るまで、試行錯誤を重ね完成したものが本書である。

二 本書の構成と概要

本編は総勢二九名の研究者が四章、一八節、五九項に渡り、さまざまな視座から近代仏教に関連する項目を紹介している。また、章末の四つのコラムでは風刺画、文学、廣告、似顔絵などが扱われ、発想のヒントを提供する。これらの内容に対しても参考文献一覧では項目ごとに先行研究が提示され、着目したテーマをより深く調べることが可能となる。加えて、日本近代仏教史年表には、重要事項と本書に関連する事項が列挙されており、西暦と和暦が両方示され、時系列順での流れを把握する際に役立つ。巻末の索引は人名及び事項（組織名・寺社名など）に分類した上で五十音順に掲載されており、辞書的な使用も可能となる。以上から本書は全体として、近代仏教の大枠の流れと個別事象を把握しやすい体裁となっていることが特徴と言える。また、人物名などにはルビが附され、入門書ということから読みやすさを重視している点も言及しておきたい。なお、本編の章と節の目次は左に示す通りである。

第一章 「近代仏教」とは何か？

第一節 「近代仏教」を定義する

第二節 日本の近代仏教の特徴とは？

第三節 「仏教の近代化」とは？

第四節 「近代化と仏教」の関係とは？

第二章 近代日本の仏教史をたどる

第一節 近代の衝撃と仏教の再編——幕末・維新期
第二節 “新しい仏教”的はじまり——明治期
第三節 社会活動の展開——大正期
第四節 戰争協力への道——昭和前期

第三章 よくわかる近代仏教の世界

第一節 グローバルに展開する
第二節 学問と大学のなかで発展する
第三節 メディアを活用する
第四節 社会問題に対応する
第五節 イデオロギーと結びつく
第六節 新しい方法で実践する
第七節 他宗教と関係する

第四章 近代仏教ナビゲーション

第一節 初心者のための人脈相関図
第二節 初心者のためのブックガイド
第三節 初心者のためのリサーチマップ

上で、ドナルド・ロペス氏の伝統仏教と近代仏教の比較、デヴィッド・マクマハン氏の「仏教モダニズム」概念、末木文美士氏の葬式仏教と近代仏教の対比概念を紹介している。次に国内に目を向け、大谷氏は磯前順一氏の宗教に対するビリーフ／プラクティスの概念と近代仏教の担い手を出家／在家に区分することの二項を分析軸とし、西山茂氏による近代日本仏教の成層構造を参考に日本近代仏教を四つの象限に分けて提示している。そして、これまでの近代仏教研究はビリーフ重視の研究が多数を占め、プラクティス重視の研究が少ないことを指摘しつつ、四つの象限から「仏教の近代化」の指標を一点点提示し、「近代仏教」の理解には国内外の要因を分析し、「仏教の近代化」のみならず「近代化と仏教」という日本の近代化における仏教の機能にも着目し、広く検討する必要性を示唆している。

第二章「近代日本の仏教史をたどる」では大谷氏と同じく編者である近藤俊太郎氏が近代仏教を幕末・維新期、明治期、大正期、昭和前期の四つの時代区分に分け、手際よく解説している。幕末・維新期では開国後の西洋への対抗としての仏教から、肉食妻帯令を例とする仏教の世俗化、教導職、管長職などの教團の近代的再編を紹介している。次に明治期については新しい仏教のはじまりとして、海外仏教研究の手法を取り入れた近代的な仏教学研究、キリスト教の論理体系を仏教に適用した主張、メディアの発展、新仏教運動や精神主義運動、従軍僧など日清・日露戦争と仏教の関係に着目している。続いて大正期は社会活

動の展開期とし、各教団の社会事業への関心、仏教書出版の成

果として『大正新脩大藏經』の刊行、西田幾多郎（一八七〇～一九四五）を中心とする京都学派の仏教への近代的理解について触れている。最後に昭和前期は戦争協力への道とし「マルクス主義と宗教」論争、ラジオ放送による仏教ブーム、敗戦後の制度の変化を取り上げている。

第三章「よくわかる近代仏教の世界」は第一・二章が近代仏教の大枠を把握するのに役立つ章であるのに対して、個別事象を取り扱っており、七節二六項、一〇七頁に渡って、一九名の筆者が近代仏教のエッセンスを提示している。本書冒頭にて吉永進一氏が大学制度の創設と学術の発展、メディアの拡大、国際化の進展という三点を近代仏教の基本的特徴としており、第一節から第三節はその特徴に沿ったテーマが中心となっている。

第四節から第七節は基本的特徴を踏まえつつ、浄土宗の社会事業、教誨師問題など社会事業に参画した仏教、禪思想と戦争など国家と仏教の関係性、瞑想、修養法、儀礼などの実践部分、キリスト教、新興類似宗教、および戦没者祭祀・慰靈を通じての神道との関係といった他宗教と仏教の対比が紹介されている。

第四章「近代仏教ナビゲーション」では近代仏教を研究する上で基礎知識、文献、手法が掲載されている。仏教系結社、ユニテリアン、女性仏教者などの分類でまとめられた人物相関図にはカバー絵も担当した内藤理恵子氏の手による似顔絵が織り込まれ、視覚的にも理解しやすい。「初学者のためのブック

ガイド」では近代宗教史、近代仏教史、近年の近代仏教研究と

いう三つの視点の必読文献を筆頭に、一五のキーワードに関する書籍、論文が紹介されている。具体的にはトランスナショナル、精神主義、新仏教運動、近代真宗史、近代法華・日蓮系、禪のグローバル化、仏教学の形成と展開、戦争、植民地主義、社会活動、民俗、キリスト教、ジョンソン、法華系新宗教、写真集という一五項目であり、各論考に対する簡潔なコメントとともに、代表的な著作の表紙写真も掲載されている。そして、「初学者のためのリサーチマップ」は近代仏教の資料を閲覧する際に便利な図書館、近代に活躍した仏教者を顕彰している各地の博物館、および近代に実際に建設された仏教にゆかりある建築物の紹介がなされ、体験学習という手段も示唆している。

三 コメント　近代仏教研究の課題

以上各章の内容をみてきた。近代仏教の特徴を探る第一章、近代という歴史区分における仏教の事例を紹介する第二章、個別テーマを扱う第三章、研究手法のヒントを与える第四章という構成である。順次読み進める以外にも、興味あるテーマを先に読み、適宜立ち返ることも有用であろう。本書の内容と有用性を示したが、儀礼を中心近代仏教の世界に足を踏み入れたばかりの評者から今後の近代仏教研究について僭越ながらコメントさせて頂きたい。

本書一二八頁で江島尚俊氏が「儀礼という側面からの新しい

知見や研究が、近代仏教研究にも必要な時期が来ている」と示唆し、また、菊地暁氏も本書二四一頁にて「多様な民間信仰をも射程におさめた、立体的・重層的な宗教史像を描き出すことが、近代仏教研究のネクスト・ステージに求められている」と指摘している。評者としては近代仏教をリードした思想的エリートだけでなく、彼らの影に隠れてしまうような僧侶や民衆たちが嘗んだ「近代仏教」に光りを当てるような、プラクティス重视の研究が今後の重要な課題になると考へている。例えば、本書一二七頁に仏前結婚式が近代に創出された儀礼として紹介されているが、一つの儀礼を詳細に追えば、宗派を超えたネットワークや、各教団が徐々に新たな儀礼を受容していく過程から教団の特徴を探ることができるだろう。また、脈々と続いてきた儀礼と近代化の影響を表す事例、例えば施餓鬼儀礼の際に鉄道会社が運賃を割り引くことや、土居浩氏による本書第三章六節四項「近代化する葬儀」にみられるような近代葬儀の歴史的変遷など、近代の仏教儀礼をより深く掘り下げ、新たな儀礼の創出と旧来の儀礼の再編を丁寧に検討することにより、近代仏教の輪郭をより明確に描くことが可能となろう。

近代仏教という分野は先行研究の研鑽を参考にしつつ、膨大な一次資料を可能な限り閲覧し、事実の整理を行なう努力と、それらの資料のなかから、関心テーマに即した事項を抽出し、一つの仮説として提示する能力が必要な分野だと考へる。これらの両輪のどちらか一方が欠けてしまえば魅力ある研究は

生じにくく、今後の発展も停滞するだろう。本書では写真、イラストがふんだんに盛り込まれ、読者は文字で表記された内容以外にも、「近代」という時代の雰囲気を身近に感じ取ることができる。この画像による伝達は近代に出版された雑誌、新聞にも表れている。本書を手に取り、近代仏教に興味を持った上で、当時実際に発行された雑誌や新聞、文献を実際にめくり、近代仏教の持つエネルギーを感じて頂きたい。評者自身も本書に励まされつつ、吉永氏が「迷宮の散歩」と称した近代仏教研究に踏み出していきたいと考えている。（二〇一六年四月刊、A五判、ix一二八〇十九頁、一三〇〇円＋税、法藏館）

註

(1) 科学研究費補助金基盤研究（B）、代表：吉永進一、研究課題番号二二〇三三〇〇一六、二〇〇八～二一年度。

(2) 科学研究費補助金基盤研究（B）、代表：大谷栄一、研究課題番号二二三三二〇〇一三、二〇一一～二四年度。なお、研究成果の一部については「近代日本宗教の雑誌アーカイブ」<http://modern-religious-archives.org>を参照のこと。